



薔薇ばらのボタン

かけはし
久美子
梯子

目標と
振り返り

□ 目的にに応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりする。

仕事部屋の壁かべに、ある写真家の作品をかけている。縦約一メートル、横約八十センチの大きな写真である。

写っているのは、細長く裂けた二枚の布地。色はあせたピンクで、プラスチックの赤いボタンが縫いつけられている。薔薇の花の形をした飾りボタンだ。一列に並んだこのボタンがあることで、破れ、ほつれたこの布地が、ブラウスの前立まへだてての部分であることがわかる。昭和二十年八月六日の朝、広島ひろしまの少女が着ていたブラウスだ。

生地きじがほぼまっすぐに裂けていることや、プラスチックのボタンが溶けずに無傷であることから、爆風ばくふうでちぎれたのではなく、治療の際、脱がせようとして鋏はさみ

を入れたのではないかと思われる。その子は亡なくなり、ブラウスが残った。

このブラウスの写真が撮られたとき、私はその場ばにいた。二〇一〇年一月、広島平和記念資料館ひろしまでのことだ。撮影者しやうえいしやは石内都氏いしうちみよこ。広島で被爆した人たちの遺品を継つ続して撮影している写真家である。

石内氏の写真との最初の出会いは、二〇〇八年に刊行された『ひろしま』という写真集しやうしんしゆだった。収録しゆ録されている遺品のほとんどが衣服で、若い女性おんなのものが多い。驚いたのは、その服たちの美しさである。花柄はながらのスカート、襟えりに白いレースの縁取りえりどりがついたギンガムチェックギンガムチェックのワ



広島少女が着ていたブラウスの前立て部分
(ひろしま#2 石内都 撮影)

ンピース、水玉のブラウス……。今でも十分着られそう
なしゃれたデザインだ。汚れ、焼けこげ、しみがついて
はいるが、それでも服たちの美しさは損なわれていない。
こんなにおしゃれな服を、当時の広島的女性たちが着て
いたことがまず驚きだった。

もう一つの驚きは、写真そのものが美しかったことだ。
写真は全てカラーで、明るい光の下で撮影されている。

これまで広島の遺品といえは陰影を強調したモノクロと
相場が決まっていた。原爆の悲惨さを伝える目的のため
に撮られてきたからだ。けれども石内氏の写真からは
「美しく撮る」という明確な意志が感じられた。

衝撃を受けた私は石内氏に会いに行き、「被爆した人
の遺品をあんなふうに美しく撮るのは勇気がいったので
はないですか。」ときいた。あの美しさはタブー破りだ
と思っただからだ。彼女は「ううん、全然。」と首を振っ
た。

「だってあの服たちは、女の子たちが着ていたときは
もつともつときれいだったのよ。それをきれいに撮って

なぜいけないの。」

私ははっとした。自分が今まで戦争の遺品を、歴史史
料として、あるいは自分かものを書くときの資料として
しか見ていなかったことに気づかされたのだ。

残酷な歴史を物語る陰影がいったん消され、服が本来
もっていた美しさがよみがえったとき、それらを着てい
た人たちの気配が、歴史の闇の中から立ち上がってくる。
そのとき初めて、彼女たちが悲惨な死を死んだという事
実だけでなく、死の瞬間まで丁寧ていねいに営まれていた日常が
あったことが、実感をもって伝わってきたのである。

ところで昭和二十年八月六日の広島で、あんなにきれ
いな服を着ていた女の人们がいたのはなぜか。そんな
ことが許されたのか。当時は皆*、もんぺをはいていたの
ではなかったか——。石内氏の写真展の図録に掲載され
ていた解説文によれば、もんぺや地味な上衣の下に、ひ
そかに身につけていたのだという。この話にも衝撃を受
けた。意外だったからではない。よくわかるからこそ衝
撃的だった。生命の危険にさらされた戦時下でも、彼女

たちはおしゃれがしたかったのだ。誰に見せるためでもなく、自分自身のために。

このことを、大学生を対象とした講演で話したとき、女子学生たちが一瞬息をのむ気配がした。涙ぐむ子、大きくうなずく子。きつと私が感じたのと同じ気持ちだったのだろう。死んでしまった女の子たちと自分が一気につながったのだ。

こうした経緯があつて、私は広島平和記念資料館での撮影に立ち会わせてもらうことになった。その日、最初に地下の収蔵庫から運ばれてきたのが、薔薇のボタンのブラウスである。くしゃくしゃになったピンクの布の塊かたまりが、撮影用に敷かれた白い紙の上に置かれたとき、それがいったい何なのかわからなかった。白い手袋をした学芸員*の女性の手が、慎重に皺しわを広げていくと、鮮やかな赤いボタンが現れ、そのとき初めて、これがブラウスだとわかったのだった。

薔薇のボタンは、現代の女の子が着る洋服についていても少しもおかしくないおしゃれなものだった。その場

15

10

5

にいたのは、石内氏とそのアシスタント、学芸員、編集者、地元のテレビ局のディレクター*と、たまたま全員が女性らだった。原爆の悲惨さの象徴しょうちゆうのようなぼろぼろの

*前立て P 50 上 7

ブラウス、ジャケットなどの前あきにつける細長い布。

*広島平和記念資料館 P 50 下 4

広島県広島市中区中島町にある博物館。原爆による広島の惨状を後世に伝えるため、原爆の資料や被爆者の遺品などを収集・展示している。

*石内都 P 50 下 5

一九四七ー 写真家。近年は衣類や身体と記憶との関わりをテーマに写真を撮り続けている。

*ギンガムチエック P 50 下 11

通常、白と別のもう一色の二色で構成された格子模様。

*タブー P 52 上 14

社会的に、してはならないとされていること。

*もんぺ P 52 下 13

腰回りにゆとりをもたせ、裾を足首のところで絞しぼったズボン状の衣服。

第二次世界大戦中、全国的に女性に着用された。

*学芸員 P 53 上 14

博物館や美術館などで、資料の収集・保管、調査研究、企画展示などに携わる専門の職員。

*ディレクター P 53 下 2

テレビ番組の演出担当者。



梯 久美子 「二九六一」

熊本県に生まれた。ノンフィクション作家。

著書に『昭和二十年夏、子供たちが見た戦争』
『百年の手紙』などがある。

《出典》「学士会会報」に掲載の文章をもとに、一部加筆したものである。

布の塊を息をつめて見ていた女たちは、薔薇のボタンが現れたとたん、ほっとしたように話し始めた。

「見て、こんなに鮮やかな赤。」「かわいいね。」「私もこんな飾りボタンの服、持ってた。小さい頃に。」「あ、私も。」

色あせて縮こまった布の塊は、戦争を知らない世代が抱く戦争のイメージに似ていた。理解できない、恐ろしいもの。簡単に触れたり語ったりしてはいけないもの。あまりに遠くて、共感の余地のないもの――。

けれども、思いがけず赤いボタンが見えたとき、その場にいた誰もが、突然回路がつながったように、理解し、共感し、何かを語りたくなった。たった数個のボタンによって、これを着ていた女性を身近に感じ、その時代の気配を感じる事ができたのである。

私は自分の仕事で、白い手袋をはめた学芸員の手のようであればいいと願う。固く縮こまった布をそっと広げ、隠れていた薔薇のボタンをあらわにした、あの手。



「ギンガムチェックのワンピース」



「水玉のブラウス」

右上：ひろしま# 20 左上：ひろしま# 7
左下：ひろしま# 69 (石内都 撮影)

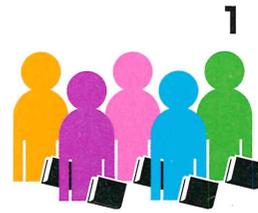
ビブリオバトルで本の世界を広げよう

ビブリオバトルとは、小学生から大人まで誰でも簡単に遊ぶことができる本の紹介コミュニケーションゲームです。「人をおして本を知る。本をおして人を知る。」をキャッチコピーにして、日本全国に広がってきています。ルールを守って、楽しみながら本の魅力を味わいましょう。

ビブリオバトルのルール

- 1 発表参加者が読んでおもしろいと思った本を持って集まる。
- 2 順番に一人五分間で本を紹介する。
- 3 それぞれの発表のあとに、参加者全員でその発表に関するディスカッションを二〜三分間行う。
- 4 全ての発表が終了したあとに、「どの本がいちばん読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員が一人一票で行い、最多票を集めた本をチャンプ本とする。

ビブリオバトルのやり方



本を選ぶ



発表する



議論する



チャンプ本を選ぶ

今まで全く興味や関心をもてなかった分野の本でも、他の人の紹介によって、意外な魅力を発見することがあります。本の魅力にとどまらず、紹介者の新たな一面も発見できるかもしれません。





図書館で開催されたビブリオバトル大会の案内や大会の様子
(東京都 荒川区立ゆいの森あらかわ)

参加する人それぞれがおもしろいと思う本を持ち寄ってビブリオバトルを開き、本の魅力をお互いに語り合ってみましょう。このようにさまざまな本と出会うことは、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながるでしょう。

読書の記録を取ろう

皆さんは、これまでにどのような本を読んできましたか。『薔薇のボタン』は、写真とともに文章を読んで味わう作品となっています。このような作品を、どのように受け止めましたか。

記録日：	満足度：☆☆☆☆☆
書名：	
著者名：	出版社名：
出版年：	分類記号：
<input type="checkbox"/> 読み終わった <input type="checkbox"/> 読みかけ (最後まで読む予定) <input type="checkbox"/> 読むのをやめた	
<input type="checkbox"/> 書店で購入 <input type="checkbox"/> 図書館で借りた <input type="checkbox"/> 勧められた：() <input type="checkbox"/> 家にあった <input type="checkbox"/> その他：()	
あらすじ、感想、心に残った文など	
次に読みたい本	

読んだ本の書名や著者名、感想などを、前のページのようなカードに記録しておく、あとで振り返ることが出来ます。感想だけでなく、読んだ時に考えたこと、その本に出会った場所、読んだ時の世の中の様子、その本を薦めてくれた人のこと、次に読みたい本なども書くといいでしよう。

読んだ本のことだけでなく、読みかけの本、途中で読むのをやめた本のことでも記録しておく、自分がどのような本が好きなのかなど、自分の読書の傾向や特徴、変化を知ることが出来ます。

大切な人に本を届けよう

読書記録を生かすなどして、これまでの読書生活を振り返り、皆さんの大切な人にお薦めの本を届けましょう。

新しい考えをもたらしてくれる文章や詩の一節、必要な情報を集めた本は、まさに生きるかてとなりうるすばらしい贈り物といえるでしょう。

大切な人が必要としているものは、その人が昔読んで忘れてしまった絵本や詩の言葉かもしれませんし、写真集かもしれません。その人が何かを探し求めている場合には、調べ物に使える図鑑や辞典、裏づけのある情報が書かれた解説書も、

素敵な贈り物になるでしょう。

皆さんも、大切な人の生きるかてになるような本を選んで贈りましょう。



この教材で学ぶ漢字

50 壁

かべ ヘキ

壁画 壁紙

50 爆

バク

爆音

52 惨

サン

惨状

52 寧

ネイ

丁寧

53 涙

ルイ

感涙 涙声

53 塊

カイ

金塊 土の塊

53 徴

チヨウ

特徴